

Title	彙報
Author(s)	
Citation	懷德. 1976, 46, p. 60-62
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90544">https://hdl.handle.net/11094/90544</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 彙報

六〇

## (懷德堂記念會)

○秋季講座 昭和五十年十月二十七日(月)より十一月一日(土)まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階講堂に於て、毎日午後六時半より八時まで、第五十一回懷德堂講座開催、聽講者延三百三人。

演題と講師

お茶の歴史

大阪大學教授 布目 潮 瀧氏

ササン朝イラン史跡

京都大學教授 本田 實 信氏

陶磁器の東西交流

關西大學教授 大庭 修 氏

地圖の東西交流

大阪大學教授 海野 一 隆氏

長沙馬王堆出土の古佚書について

大阪市立大學教授 佐藤武敏氏

モンゴル帝國時代の大旅行家

大阪大學教授 山田 信 夫氏

○昭和五十年四月一日 理事梅溪昇氏事業運営委員就任。

○記念祭典 昭和五十年十月二十四日(金)東區北濱三丁目日本會(適敷内)に於て、午後一時二十分記念祭典執行終つて午後二時より大阪大學名譽教授池上禎造氏の「いわゆる日本語のブームについて」と題する記念講演があつた。

○理事釜洞醇太郎氏 昭和五十年十月二十四日退任、評議員就任。

○昭和五十年十月二十四日 大阪大學總長若槻哲雄氏理事就任。  
○昭和五十年十月二十四日 住友銀行秘書役森川敏雄、大阪大學文學部事務長、三隅隆兩氏幹事就任(兩氏共經理擔任)

○前幹事、評議員岡野廉平氏 昭和五十一年一月二十九日逝去。

○理事 梅溪昇氏 昭和五十一年三月三十一日退任。

○昭和五十一年四月一日 大阪大學文學部長岸畑豐氏理事就任。

○春季講座 昭和五十一年五月二十四日(月)より二十九日(土)まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階講堂に於て、毎日午後六時半より八時まで、第五十二回懷德堂講座開催、聽講者延三百六十三人。

演題と講師

漢字の文化

京都大學名譽教授 平岡 武 夫氏

「わが生涯の最良の日々」

—インド思想と佛教の道— 大阪大學教授 山口 惠 照氏

民族主義 愛知教育大學助教授

—ユダヤ人を中心として— 兒玉 昇 氏

唐人の庶民生活取材の樂府 大阪教育大學教授 増田清秀氏

東洋的寛容 廣島大學名譽教授 池田 末 利氏

中國人の孝・日本人の孝 名古屋大學助教授 加地 伸 行氏

## 懷德堂記念扇子目錄

(昭和四十一年以降)

昭和五十一年十月 中井履軒先生墨迹

(牀前看月光 疑是地上霜 舉頭望山月 低頭思故郷)

(堂友會記事)

十月一日 懷德四十五號發行。

十一月三日 近江路の旅に出る。先づ三上神社に賽す。會遊の社であったが、初冬の景色は又一入興趣を深めるものがあつた。社殿の莊嚴華麗は言を用いない。しかも有名な角力人形に一段の興味を惹かれた。次にバスで兵主大社に詣でた。この兵主大社は、大國主神の異名、八千矛神を祀り「つわものぬし」と呼稱する。その鎮座は大國主神が天孫の勅に應じて皇御孫命に國土を譲り給う時に、御杖とされた廣矛を授けられてより宮中に「國平御矛」として御鎮祭になつたが、景行天皇御矛の神威を畏み宮城近き空師に神地を占し兵主大神と仰ぎ、皇子稻背入彦尊をしてこれを祀らしめ給うに初まるという。その後皇室や武將達の獻納された神寶等は神社側の厚意により賞し、十分に觀賞して眼福を満した。一休みして辭去し、ついで錦織寺に參拜した。この寺は嘉禎元年親鸞聖人が關東から歸洛の途次この地方に留錫して、教化をされたのである。それで聖人の遺跡として菘掛け松天安堂などを見て近江大橋を渡つて、湖西の聖衆來迎寺に着く。この寺は桓武天皇九年(七七〇)天台宗祖傳教大師の御草創にかかり初地藏教院と稱したが、一條天皇の長保三年(一〇〇一)比叡山横河惠心院の先德源信和尙(惠心僧都)がこの地に於て水想觀をこらし紫雲の中に彌陀聖衆來迎されたので、即ちそれから今の聖衆來迎寺と改稱し専ら念佛弘通の道場と定めて高く勝幢を掲

げられたのである。

この寺詣の時は漸く夕やみも迫つた折りであつたが、山中管長は御多忙をさいて親しく佛殿や佛像且つ數多くの靈寶類の御案内下さつて見學の便を圖つて頂いたことを感謝する。

五月十六日 守山市の史跡見學會を催す。先づ東門院に着く。

延暦年間傳教大師の延曆寺開創の時ここに東門を建立したのに創まるという。いかにも古寺の風格のある本堂に千手觀音と十一面觀音を本尊として厨子内に安置してあつて、内陣右方に立つ毘沙門天王像(文、藤原)は形態よくとのつて居る。それに本堂横の護摩堂の本尊不動明王座像(文、藤原)木彫、彩色像で、御顔の忿怒相きわめて強く、迫力に富む。

藤原像である。そして晝食後境内の五重石塔(文、鎌倉)寶

篋印塔(美、鎌倉)を見てから勝部神社の本殿(美、鎌倉)を見て、木ノ濱の集落の中にある福林寺で十一面觀音立像

(文、藤原)は木彫、彩色の美しい佛様を寶庫内で難有拜觀し又寶塔二基(美、鎌倉)が相對する様に立つて居るのを見て小津神社に車を走らせたが折からの雨のため十分の拜觀出來なかつた。これにて解散した。以上二回の講師は滋賀女子短大教授宇野茂樹先生であつた。

五月二十七日 田頭義雄氏より金二萬圓寄附を受く。よつて維持會員に推す。

五月二十八日 三原辰之助氏に委員を依頼する。

六月三十日 天王寺區四天王寺の靈寶見學會を催した。參加者多數。

七月十七、十八日 夏季見學旅行を大津市坊村町葛川明王院に行う。講師は滋賀女子短大教授宇野茂樹先生である。先づ堅田驛からバスで還來神社に齎した。この神社は旅や戦に出る人が無事に歸つて來るといふ信仰で知られている。それから途中の右手に彌陀、地藏磨崖佛（室町）を見た。大きい岩面の上部は數體の小佛像を彫刻したものであつた。それから少し行つた民家の間の高い所にある勝華寺のささやかな堂内に美しい立派な佛様を見た。この堂は回峰行者がここで明王院參籠の準備をする所である。堂前左方に貞和四年在銘の寶塔が立つて居る。基礎の格狭間には寶瓶三基蓮と開蓮華が見られる。そして反對の右手一段低い所に古水船（鎌倉）がある。一・七五メートルの長圓形に作つたもので周縁に弘長三年の年號があつた。それから花折峠のトンネルを越した。

以前峠越えは可成の困難があつたのであるが、今は數分でトンネルを通ることが出来るので以前の苦勞を想像することは出来ない。明王院のある坊村町に一時頃ついたとして涼を入れて休憩した。折柄俄雨、汗を流して地主神社に詣でた。

この神社は昔は地主大權現とよび相應和尚明王院創建の時に地主の神としてまつり鎮守としたのである。不動瀧が流れる谷川の橋を渡つて長い石段の上にある杉木立におおわれた、明王院の姿を見た。この明王院は貞觀元年叡山の相應和尚が葛川の瀧のここで生身の不動明王を感得して明王院を開創したと傳える。相應和尚は叡山の無動寺庵を開いた人である。そして後回峰行者の行場なつた。そして葛野常滿氏の説明で

堂内や堂外の案内をして貰つた。又夜は堂内の行事を見物した。十八日バスで朽木町岩瀬の興聖寺に釋迦如來坐像（文、藤原）を拜觀又境内の秀隣寺庭園（名、室町）を見てから藤樹寺院跡（史、江戸）を見藤樹先生墓を展して、鶴川四十八體佛を見て（縣文、室町）を見、ついで白鬚神社に昇殿參拜した。本殿は（文、桃山）である。後宮司の説明をききて今回の見學の旅を閉じた。

#### 新會員紹介

松永光治、松永長太郎、中井永之助、前島秀雄、佐藤須賀子、鶴岡 翠、安藤 進、永井賢三、三村市子、海貝福松、大略とし子

#### 死亡會員

角田昭二